

# 令和6年度「全国学力・学習状況調査」の結果 —分析から見てきた成果・課題と今後の取組について—

区 名 西淀川

学 校 名 歌島小学校

学校長名 岩田一博

文部科学省による「全国学力・学習状況調査」について、令和6年4月18日（木）に、6年生を対象として、「教科（国語・算数）に関する調査」と「児童質問調査」を実施いたしました。

大阪市教育委員会では、保護者や地域の皆様等に説明責任を果たすとともに、より一層教育に関心をお持ちいただき、教育活動にご協力いただくため、各学校が調査結果や調査結果から明らかになった現状等について公表するものとしています。

本校でも、調査結果の分析を行い、これまでの成果や今後取り組むべき課題について明らかにしてまいりましたので、本市教育委員会の方針に則り公表いたします。

なお、本調査により測定できるのは、学力の特定の一部であり、学校における教育活動の一側面に過ぎません。

## 1 調査の目的

義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

## 2 調査内容

### (1) 教科に関する調査

- ・国語
- ・算数

### (2) 質問調査

- ・児童に対する調査
- ・学校に対する調査

## 3 調査の対象

- ・国・公・私立学校の小学校第6学年の原則として全児童
- ・学校では、第6学年 32 名

## 令和6年度「全国学力・学習状況調査」結果の概要

国語・算数とも全国平均・大阪市平均よりも低い結果であった。

国語では、全体を視野に入れながら中心的に取り上げるという問題内容だったが、一定程度関係を見出したり、必要な言葉を加えることができたりしていた一方で、自分の考えが伝わるように書き表し方に課題がみられた。算数では、「速さ」で二つの数量の関係に着目して意味や表し方についての考察や球と立体の長さの関係を捉えた遺跡の求め方を式に表すことなどに課題がみられた。

児童質問紙調査では、「人が困っているときは、進んで助けていますか」「学級の友達との間で話し合う活動を通じて、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気付いたりすることができていますか」と考えている児童の割合が全国平均を大きく上回っている一方、「自分にはよいところがある」「先生は、あなたの良いところを認めてくれている」「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか」「地域や社会をよくするために何かしてみたいと思いますか」と考えている児童の割合は全国平均を大きく下回っていた。

## 分析から見えてきた成果・課題

教科に関する調査より

〔国語〕

情報と情報との関係付けの仕方、図などによる語句と語句との関係の表し方を理解し使うことはできている。文中の主語と述語の関係を捉えることはできている。

人物像や物語の全体像を具体的に想像したり、表現の効果を考えたり、目的や意図に応じて、集めた材料を分類したり関係付けたりして、伝えたいことを明確にすることに課題がある。また、事実と感想、意見とを区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することにも課題がある。

〔算数〕

円グラフの特徴を理解し、割合を読み取ることはできている。また、数量の関係を、問題場面通りに□を用いた式に表すことはできている。

速さが一定であることを基に、道のりと時間の関係について考察することや、球の直径の長さと立方体の一辺の長さの関係を捉え、立方体の体積の求め方を式に表すことに課題がある。

質問調査より

就寝に関しては決まった時間でできているという回答が全国平均よりも高かった一方で起床時刻は同じではないという状況だった。また、「自分にはよいところがあると思いますか」「先生があなたのよいところを認めてくれている」「困りごとや不安がある時に、先生や学校にいる大人にいつでも相談できますか」の回答では、そう思っていない子どもの割合が全国平均に比べて高かった。「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか」でも肯定的回答の割合が低い。認められていない気持ち、満たされていない気持ちを感じている子どもがいることが推測できる。

## 今後の取組(アクションプラン)

目的や意図に応じて、話す際の材料を集め、分類したり関係付けたりして、伝え合う内容を検討する指導、また、事実を客観的に書くとともに、その事実と感想や意見との関係を区別して書くなど、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫する指導の充実が必要である。また、二つの数量の関係に着目し、場面に応じて速さの比べ方を考察したり、速さなど単位量当たりの大きさの意味などについて理解できるようにする指導の充実が必要である。

また、日々の取組として、自己有用感、自己肯定感を高めていく取組にもより力を入れていきたい。子どもたちが活躍できる場、達成感や成功体験を経験できる機会をできるだけ多く確保し、やればできるという思いを少しずつでも積み重ねられるようにしていきたい。